

# 26P-pm227

## Studying the Drugs Cited in Medical Texts of Ancient China from the Perspective of Productivity

○塩原 仁子<sup>1</sup>, 真下 順一<sup>1</sup>(<sup>1</sup>昭和大薬)

中国における本草の歴史は、1期：前本草期とでもいうべき時代、2期：本草の草創期にあたる漢晋時代、3期：陶弘景から『証類本草』に至る本草の最盛期、4期：薬理説が主体となった金元以降の時代の4期に大別される。秦・漢時代以来、薬学の領域では薬物・薬品が絶えず増加し、薬物に対する知識が豊富になっていった。それと共に中国に現存する最古の薬物学である『神農本草経』以外にも、『桐君採薬録』『李氏薬録』『呉普本草』等の薬物学についての専門書が著された。『呉普本草』は、華佗の弟子、呉普の著作で、全6巻。薬物の範囲は441種に及ぶ。

『呉普本草』の書名が最初に現われたのは、中国南北梁の阮孝緒が諸方の蔵書家らの間を訪ね歩いて作成した図書目録である『七録』で本書自体は、散失した為見ることはできないが、唐の道宣の『広弘明集』巻3には、序文及び篇目が収録されており、それにより本書の姿を伺い知ることができる。陶弘景著書の『本草経集注』は中国主流本草の根幹を築いた中国医学史上、作者の明らかな本草学書である。呉晋は広陵出身で「普く佗療に依準し、全済する所多し」と言われた名医家で、気功法「五禽戯」で身体を鍛錬。呉晋は師華佗の継承者で、『後漢書』『魏志』の華佗伝に附載されており学術思想は殆どが師より直伝された。『呉普本草』成立は、239年前後の説がある。北宋時代に失伝散佚。内容の大部分は、唐宗時代の薬物書・医学書の中に残存する。『太平御覧』には最も多くの引用があり、『呉普本草』から転載された薬物は191種に及ぶ。『呉普本草』は、『神農本草経』の内容を援用、薬物の生態・適応症・禁忌症等の詳しい内容も加えている。『呉普本草』が後世の薬物学に与えた影響は多大で意義深いものと思われる。